

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。  
近江日野商人館では、日野商人関係の資料や、町内の民俗資料などの調査、研究を行っています。今回、非常に貴重な明治時代の民俗資料「折形」が町内で多数見つかりましたので、ご紹介します。

## 贈答のたしなみ

### 「折形」の世界

私たちは、家族をはじめ、友人、知人、近所や職場の人など、多くの人々に囲まれて日々を過ごしています。対人関係を円滑にする手段として、しばしば、贈答というを行います。

お中元、お歳暮をはじめ、さまざまなお祝い事やお見舞い事など、年間や一生を通して贈答の機会はたくさんありますが、「寸志」という言葉で表されるように、贈答は、物に託して、自分の真心を相手にやんわりと伝える行為です。

少し改まった贈答をする場合には、贈答品をのし紙などで「包む」という、奥ゆかしい習わしが昔からあり、工夫をこらし、心を込めて折られた包み紙は、「折形」と呼ばれています。

折形は折り紙の一種ですが、贈る目的や贈る物に応じて、昔から

さまざまな折形が一枚の紙で折られています。

現在では、「包む」という深い意味合いを考えることもなく、市販ののし紙やのし袋を無造作に使う時代になっていきますが、かつては折り方を工夫し、心を込めて丁寧に折ることで、相手への真心をどのように演出するかという、贈り手側のほんのりとした気遣いが込められていました。それだけに、多種多様の折形が産み出され、長い歴史の中で練りあげられたみごとに意匠や美的感性を、折形に見ることが出来ます。

折形には、たとえば「熨斗包み」、「扇子包み」、「銀子包み」、「胡麻塩包み」、「砂金包み」、「衣桁包み」など、それぞれ名前がつけられています。なかには、かつては盛んに折られていたものが、時代の変化と共に忘れ去られ、現在には伝わらなかつた折形も多くあります。かつての時代には、結婚前の女

性が身に付けるべきたしなみとして折形を学び、嫁入り道具として折形を持参する風習があり、日野町内においても、いまなお大切に保存されている方もおられます。

今回、日野町内で、明治時代の末期に折られた貴重な折形八十点余りが一括して発見されました。

この折形は、結婚前の女性たちに着物の縫い方を教えつつ、礼儀作法の指導もしておられた明治二十三年生まれの女性が折られたもので、「お針子さん」の教材として使用されていた多くの折形が今回見つかったのです。

なかには、現在には伝わっていない貴重な折形も多く含まれている様子で、現在、日野商人館で調査中です。

今回発見された折形は、一月五日からの日野商人館の新春企画展で展示しますので、日本の隠れた伝統的芸術「折形」の世界を、ぜひ味わってください。



▲日野で発見された折形